

季刊 ダンサーズ

DANCEART

CONTEMPORARY DANCE MAGAZINE DANCE CAFE SPECIAL ISSUE

1998.SUMMER **11**

No.



Wim Vandekeybus
Boris Charmatz
Rambert Dance Company

6^{es} RENCONTRES
CHOREGRAPHIQUES
INTERNATIONALES
DE SEINE-SAINT-DENIS 1998



INTERNATIONAL
ESTABLISHED
CENTRE

SCHORREGRAPHIQUES
ESTABLISHED
SHINE-SAINTE-DENIS

第6回パニョレ国際振付賞

●松川真一郎

取材
KUMIKO ONIKATA
SHINICHIROH MATSUKAWA
MARI RAN (パリ在住)
photo/YOICHI TSUKADA

第6回パニョレ国際振付賞 (S.S.D. 国際振付会議) の受賞ガラ公演が、パリ郊外ボビニ MC93 で開催された (1998.5.12-17)。350人の応募者からビデオ審査を通過した新人部門82人、プロ部門97人の計179人の新人振付家が19カ国31のプラットフォームで上演審査を受け、公募、国家推薦を含め最終的に14カ国16名の受賞者が決定した。

大会初日を飾るゲスト公演では、デヴィット・カーン (フランクフルト・バレエのダンサー兼振付家) 振付による作品「10 Blisters」(10の肉刺/43分) が披露された。会場は高揚した熱気に包まれ、通路にまで溢れ返った観客が見守るなか、シルヴィ・ギエムが軽やかな奇跡的なシルエットを紡ぎ出していく。しかし、終演後の喝采の大部分がギエムという圧倒的存在に集中したことを考えれば、振付家としてカーンがダンサーの存在を作品中に緻密に制御できなかったことは残念だった。ギエムへの賛辞は作品質とかけ離れた部分で生まれていたように思われてならない。

ともあれ、ガラ公演は各日平均で3作品が連続で上演され、最終プログラム終演後には例年通り、各賞評議員による特別賞の授賞式が行われた。ヤン・ファーブル賞をトーマスハワート (ベルギー)、ボニーバード賞をバラク・マーシャル (イスラエル) が獲得し、ADAMI カンパニー賞はフィリップ・セイレ (スイス)、バラク・マーシャル、ADAMI ダンサー賞はウェイン・マクレガー (イギリス)、タチアナ・ゴルデヴァ (サシャペペリャエフ・キネティックシアター/ロシア) がそれぞれ獲得した。ADAMI カンパニー特別賞にはアー・スーン・アーン (韓国)、マジャ・ファリック (スロヴェニア)、ベルナルド・グランディエ (フランス)、ヨランダ・スネイス (イギリス) の4カンパニー、ADAMI ダンサー特別賞にスロヴェニア、イスラエル、ヴェネズエラ、ロシア、フランス、南アフリカのカンパニーから7人のダンサーが選出された。

ここでは各特別賞該当作品を中心に、特筆に値すると判断した7作品を取り上げたい。



時代を見つめ、自己をとらえて、 生きた身体をとおして 作品をつくりあげる



文●關 真里
写真●塚田洋一

スハリ、ロリーナ・ニクラスに聞く

振付家は何をするべきか

今回の国際振付賞を選考するに至っての基準は、という質問にははっきりと「良い作品だけを選んだ」とのこと。良い作品とは、探究心のあるもの、つまり媚び溜ったり安易に作ったものではなく、たとえ未完成の作品であっても、興味の持てるもの。ただしこれが誰にとっても良い作品とは限らない。たとえば美術館にいてどれが絶対的に良い作品と言えるだろうか。ダンスについても同じこと。意表をつくものや、人目をひくような劇的なものよりも、何を追及しているかということに重点を置いている。流ればかりを追い求めていくのではなく、腰を据えて自信の芸術追及の中で自分達が生き、感じているものを見つめて行くことが大切である。振付家にとっての探究の方法としては、自分が新たに感じたり発見したことを、どうしたら以前の繰り返しにならず違うものに発展できるか、どういうものから、どういうやり方で新しいものがうまれてくるかということに自分に関わらせることである。例えば今、ある方向性で作品をとことん創り続け、次の段階が見えてきたときに次の方向性について追及をし始めれば良いのです。単に目新しいものを創ることが目的ではない。興業的に受けることを考えるのではなく、自分自身を深めて行くことが大切なのです。社会的な面に対しても。つまり、世間で成功した著名なアーティストとしてではなく、社会の中での一人のアーティストとしての自分の役割、主張、何が出来るかということを考えるべきだ。これは決して外見なことではなく、非常に大切なことである。

日本では「パニョレのコンクール」というイメージがまだ強いようだし、日本語では「パニョレ国際振付賞」というタイトルになってしまっているが、フランス語を直訳すれば、RENCONTRES (出合い) CHOREGRAPHIQUES (振付の) INTERNATIONALES (国際的な) DE SEINE-SAINT-DENIS

(セーヌ・サンドニ県での一帯に位置する県)となるように「出合い」が目的であって、各国の振付家がそれぞれの文化、自分の背景をもって一同に集まり、育った環境も文化も違う人々が出合い、作品に触れ、新しいものを知る、或いは今までに気づけなかったことに気づく場所なのです。

今年、日本の作品が一つもサンドニに招待されなかったのは作品が悪かったのではなく、興味の引かれるものもあつたが、飛び抜けてよい作品がなかったから。「追求」という点において個性に欠けていたよに思える。また、一回きりの参加ではなく自分の成果を見るためにも、何度も挑戦し、パニョレに戻ってきてほしい。作品を創り、応募し、横浜プラットホームに選ばれたということは既に素晴らしい作品なのだから、自分達で近隣国をツアーして回ることも可能だと思う。日本のプラットフォームは「横浜での出合い」なので、例えば、今回のように一つの賞だけでなく、音楽編曲賞や照明賞、美術賞を与えたりとか、特に追求の精神を重視した作品に賞を与えれば、今までない新しいものが出てくるはずだし、振付家がさらに作品を掘り下げ、全身できるようになればよいのではないか。また次回への提案として、振付けのセッションをするというのはどうだろうか。例えば、5日間のセミナーで何人かのアーティストを招き、ダンスだけでなく、ビデオや映画、絵画などについての作品を見て、分析し、創作というものが何であるか、主題が何であるかを理解するために話し合う。芸術的な正当性や強力な文化を創り上げていく必要性もある。動きの面白さだけを追求するだけでは突き進んではいけない。

現代芸術に携わるものは、他の芸術家たちと自分の持っている経験を入り交えるべきだし、これが振付家をよりオープンにする方法です。その社会に生きた身体を通して踊り、作品の中で何かを語らなければならない。そして、常に探究の精神をもって全身してほしい。2年後に会えることを楽しみにしています。

コンテンポラリー・ダンスの あらたな時代の到来と期待をこめて

パニョレ国際振付センターディレクター、ロリーナ・ニクラスが来日した。横浜ランドマークホールで「新進振付家作品公開クリニック」が開催され(3月22日(土)、出場者たちにアドバイスする彼女は、今後、彼らがパニョレ国際振付賞に応募するであろうダンサーであることを十分に考慮したうえで多岐に渡る意見を率直に述べていた。まず作品の感想に始まり、注意すべき点、また、音楽、照明、そしてダンス・コンセプトを表現するトータルな舞台のあり方といったように、9年間に渡り、パニョレ国際振付賞を主催してきたディレクターとして経験からのアドバイスはダンサーたちを大いに励ますものであった。

1994年の「パニョレ国際振付賞プロフェッショナル振付家グランプリ」を受賞したアマンダ・ミラーが「プリティー・アグリー・ダンスカンパニー」を率いて初来日公演(「横浜ダンス・コレクション'97」のプログラムでの上演、2月28日/3月1~2日)した。そこで表現された身体表現は、卓越した技巧に支えられ、音楽の時間は空間をよぎる肉体の呼吸に織り込まれ、跳躍は、立ち上る渦巻きのような旋回とな

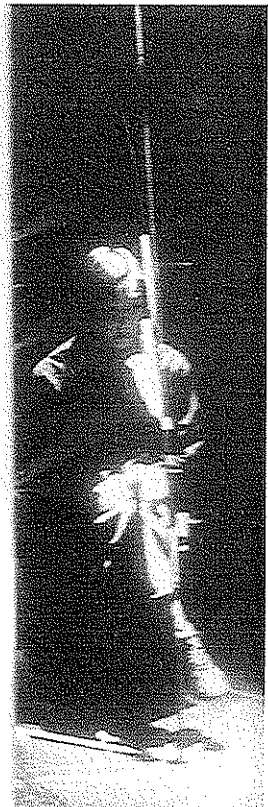
り、次々に踏み出されるステップは空間を切り裂き、しかも音楽の肉体と魂を出現させたダンスは、身震いするほどの美しさで空間に波のようにうねるダイナミズムを孕んでいた。

アマンダ・ミラーの振付家としての才能を世界に広く知らしめた「パニョレ国際振付賞」の役割の大きさとともに、あらたな時代の到来と期待をこめて1998年の「国際振付賞」の開催を待ちたい。

第6回セヌ・サン・ドニ県パニョレ国際振付賞が、1998年5月13日~17日に開催される。ロリーナ・ニクラスが就任したのは1988年である。パニョレ国際振付賞は、ロリーナ・ニクラスの就任から2年後の1990年に「パニョレ・コンクール」からこの名称に改められたのである。1969年にスタートした若手振付家の登竜門「パニョレ・コンクール」は1974年に文化省が公認し、毎年開催されるようになった。そこからは、「ヌーベル・ダンスの旗手」と称されるジャン＝クロード・ガロッタ、マギー・マランといった第一世代、第二世代のレスキス、ダニエル・ラリーユ、第三世代のスタジオd.m、アンジュラン・ブレルジョカージュらがいる。また、日本人振付家、勅使田原二郎も「パニョレ・コンクール」に入賞し、その後凱旋公演を経て世界の桧舞台へと飛躍していく。

1990年に正式名称を「国際振付賞」としたロリーナ・ニクラスは、若手振付家の育成と彼らへの助成そして作品の普及を目的として、あらたな組織作り着手した。現代舞踊の創造活動を国際的なレベルで広げていこうとするその意志は、1996年から、世界各地でプラットフォーム(国内推薦会)を実施し、翌年、各国の本選出場資格を得た振付家が、パリ郊外ポピニ劇場で作品を上演して「国際振付賞」が決定されることとなった。隔年で開催される「国際振付賞」の第6回の募集は、1997年3月~6月16日までに寄せられた書類とビデオでの選考を経て、10月~1998年3月、フランス、ドイツ、日本をはじめとする世界19カ国、30カ所でプラットフォームが(国内推薦会)開催される。その後、受賞決定者が「パニョレ国際振付賞受賞者ガラ公演」に出場することとなる。

1991年、日本国内推薦会(=「プラットフォーム」と称する)の第一回が東京で開催された。そこで選考された振付家黒沢美香は、その翌年、1992年



「パニョレ・コンクール」受賞作品「プリティー・アグリー」のダンスカンパニー「プリティー・アグリー」のメンバー。写真：高橋洋一



ロリーナ・ニクラス
写真：木村洋一

